

社会科

NAVI

ナビプラス

小学社会



「小学社会」の 3次(つぎ)構造とは？

真正な問題解決学習を導く 3次(つぎ)構造

広島大学大学院准教授 永田忠道

本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ！

日文

検索



※本冊子掲載QRコードのリンク先コンテンツは予告なく変更または削除する場合があります。

※QRコードは、株式会社デンソーウェブの登録商標です。

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

学習問題から、さらに考えたい問題への導き方

子どもの素朴な疑問から学習問題、さらに考えたい問題を導く3次（つぎ）構造

1. 水害から命を守るために、どのようなくふうや努力があるのかな？

2. 見学に行って調べてみようよ。

3. しゅっぱ〜つ！

4. 雨がたくさん降っても川から水があふれないように、地下調整池があったよ。

5. 防災情報も出されているよ。

6. 森林は水をたくわえてくれる「緑のダム」だから、森林を守る取り組みもされているのだね。

7. これで水害から命を守るための取り組みがよく分かりましたね。

8. ちょっと待ったー！

9. ニチビー

見学も行ったし、これでこの学習はばっちりだ！

わたしたちは何もしなくてもいいのかな？？

わたしたちにできることは無いのかな？？

今のままでは、せっかく学習したことが他人事で終わってしまうよ！子どもの頭の中を見て！

どうしよう！子どもたちが新しい疑問を持っているみたいだ…。

そうだね。子どもはもっと深く考えたいみたい。

そんなときは、二つ目の学習問題（「さらに考えたい問題」）をつかって、もっと追究すればいいんだよ！



社会科の単元は、 どう組み立てられているのか

「小学社会」3次^{つき}構造を解明する

社会科では、単元や単元の構成が大事だと言われます。それはなぜなのでしょう。

また、社会科では、単元が「つかむ・調べる・まとめる・深める」や「であう・ふかめる・いかす」等々の段階や過程として進められることが一般化していますが、それはなぜなのでしょう。

そして、日本文教出版発行の教科書、『小学社会』では、なぜ単元の構成を3次^{つき}「段階」や「過程」ではなく、3次^{つき}「構造」としているのでしょうか。この構造のなかで、問題解決学習がどのように展開されているのでしょうか。

本冊子では、これらの問題について、少しずつ具体的な単元や授業の在り方の実際に即して解説していきます。

1 社会科の単元を、『小学社会』ではどのように組み立てているのか？

小学校の社会科において、単元の構成はとても重要です。社会科では一時間一時間ごとの授業展開も大切にされていますが、それ以上に数時間や10時間を超えて構成されることもある単元に基づいた学習がこれまでも大事にされてきています。

近年は、社会科の単元について、「つかむ・調べる・まとめる・深める」や「である・ふかめる・いかす」等々、地域や学校によって、様々な学習の段階性や発展性のもとに授業が進められることが一般的となっています。

このような社会科の学習や単元のあり方について、令和2年度版『小学社会』では**3次（つぎ）構造**による問題解決学習としての単元の組み立てを教科書上で採用しています。その『小学社会』における**3次構造**を簡潔に分かりやすく示してみると巻頭のマンガのようになります。

「しゅっぱつ」の前までが**第1次（つぎ）**、「さらに考えたい問題」をつくるまでが**第2次（つぎ）**のイメージです。問題解決学習を大切にしている『小学社会』では、それぞれの単元での学習問題を見いだしていくことが**第1次**の大きな役割となります。

様々な資料を調べたり、色々な場所を見学したり、地域の人々に聞き取りをしたりすることを通して、単元の学習問題を追究して、自分たちなりの学習成果をまとめていくのが**第2次**です。

単元によっては、この**第2次**をもって学習に一区切りをつける場合もありますが、現行の学習指導要領において、深い学びの方向性として「選択・判断」や「多角的に考える」ことが示されたことから、これらが示されている単元については『小学社会』では**第2次**の先に、さらに考えたい問題を子どもたちから掘り起こしたり掘り下げたりすることで、問題解決学習の連続性や発展性を導き出し、未来社会へむけて探究し続ける子どもたちの学びを支援する**第3次（つぎ）**までを位置づけています。

それでは、まず、社会科における単元や単元の構成の重要性と、単元が段階・過程として進められるわけ

を明らかにしておきます。

2 社会科では、なぜ単元や単元の構成が大事だと言われるのか？

現在の小学校の社会科では、第3学年では市区町村、第4学年では都道府県、第5学年では国土・産業・環境、第6学年では政治・歴史・国際理解に関する学習を行うことになっています。しかしながら、社会科で学習対象とする現実の社会や過去の社会についての事物や事象は刻一刻と変動しています。そのため、本来的に社会科は、日々変化する目の前の社会の現実や過去について子どもたちと教師が共に悩み考え合いながら学習を進められることが理想的ですが、実際には、そのような学習展開の実現はとても難しいことです。

このような社会科における悩みやジレンマは、最近だけでなく実に**70年以上も続く、社会科の宿命でもあり続けています**。70年以上前に日本の小学校で社会科の授業が始められるようになった際に、最初の学習指導要領が発行された翌年には『小学校社会科学習指導要領補説』が刊行されています。この補説では当時から社会科の悩みやジレンマについて次のような指摘がされています。

現在社会科の指導がおちいりやすい二つの危険があります。その一つは、児童の自発性を重んじようとして、教師が児童の動くままにつき従い、十分教育の目的を達することができないということ、もう一つは、教師の要求と立場とで固定したわくを作り、既成の計画によって児童をしぼろうとすることにあります。

すなわち、社会科の授業では、**児童の自発性と教師の計画性のいずれかが強くなりすぎれば、社会科が目指すべき学習の実現には至らない、との指摘**です。では、どうすれば良いのでしょうか。これについて補説では次のような説明がなされています。

この二方面の危険をどうすれば排除することができるか、いかにすれば、教師の要求と児童の要求とをどうすれば両立させることができるかという難問を解決するかぎとして、**作業単元が必要となってくるのであります。作業単元の任務もまたここにあり得るということです。**

ここでの作業単元とは、学習活動が次々と自然に発



展していつて形づくる系列であるとされており、教材の一区分の意味で用いられる教材単元と差別化するために使用された用語です。小学校の社会科では、このような作業単元の考え方が70年以上にわたって大事に育まれてきてはいますが、単元を構成する中で、どうしても教師側の意図や計画が強くなりすぎたり、逆に学習を児童側に委ねすぎてしまい、学びが「はいまわる」との危惧もつきまとい続けたりしています。

この点について、1950年に当時の文部省は『小学校社会科学習指導法』を発行して、その中で単元の構成の在り方を導く「問題解決の諸段階」を指し示しました。ここから現在までに至る社会科の単元の「段階」や「過程」と「構造」の相克が続いています。

3 社会科では、なぜ単元が「段階」や「過程」として学習が進められるのか？

社会科における「つかむ・調べる・まとめる・深める」、「であう・ふかめる・いかす」などの単元の「段階」は、問題解決学習の一般的な「過程」と受けとめられていますが、その端緒となったのは、先述のように約70年前に当時の文部省から示された「問題解決の諸段階」にあります。

1950年刊行の文部省『小学校社会科学習指導法』では、「問題解決の諸段階」の中で問題解決の典型的な「段階」として、次の6点が示されました。

- ① 児童が問題に直面すること
- ② 問題を明確にすること
- ③ 問題解決の手順の計画を立てること
- ④ その計画に基づいて、問題の解決に必要な資料となる知識を集めること
- ⑤ 知識を交換し合うこと。そして集められた知識をもととして、問題の解決の見とおし、すなわち仮説を立てること
- ⑥ この仮説を検討し、確実な解決方法に到達すること

最近では、現行の学習指導要領や教科書の方向性を導いた2016年の中央教育審議会の答申において、小学校での問題解決的な学習活動を充実させるための学習活動として、①課題把握（動機付けや方向付け）、②課題追究（情報収集や考察・構想）、③課題解決（まとめや振り返り）との例示が行われています。

このような単元の学びの「過程」や学習の「段階」について、ここで改めて理解しておきたいことがあります。それは、**現在に至る単元の学びの「過程」や学習の「段階」はもともと、「過程」や「段階」が先にあるものではないことです。**

かつての文部省による『小学校社会科学習指導法』における「問題解決の諸段階」は、ジョン・デューイの『思考の方法』での「反省的思考の5つの側面あるいは局面」に基づいて設定されたものと位置づけられています（藤井千春1995）。しかしながら、あくまでもデューイは問題解決をした思考の働きを解決の後から整理して検討した場合に浮かび上がってくる思考の性質としての「側面あるいは局面」と主張しており、



これは思考の「過程」がたどる「段階」ではない、とされています（藤井 1995）。また、片上宗二（1998）は、問題解決学習の5次元構造として、教育原理・カリキュラム構成原理・学習の方法原理・思考の論理・学習の方法としての問題解決学習の整理を行っています。その中では、当時の文部省による『小学校社会科学学習指導法』が「学習の方法」としての問題解決学習を定式化する「段階」を導いたと位置づけています。

すなわち、社会科における単元のもとでの問題解決学習で大事なことは、「つかむ・調べる・まとめる・深める」や「である・ふかめる・いかす」、「課題把握（動機付けや方向付け）・課題追究（情報収集や考察・構想）・課題解決（まとめや振り返り）」のような学習の「段階」や「過程」を踏みさえすれば、何らかの学習の到達点にたどり着けるような単純で簡単な学びではないことを意識することです。

藤井千春（1995）『「問題解決的な学習」における「問題」とその「解決」についての検討』社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第7号, pp.7-12
 片上宗二（1998）『社会科の50年とその展望』全国社会科教育学会『社会科研究』第48号, pp.1-10

4 『小学社会』では、なぜ単元の構成を3次「構造」としているのか？

ここまで、社会科における単元の重要性や、社会科で単元が「段階」や「過程」として学習が進められるようになっている経緯について、明らかにしてきました。その上で、『小学社会』では、なぜ単元の構成を3次「構造」としているのか、について解説していきます。

『小学社会』の3次構造は、社会科の「学習の方法」や学習の「段階」や「過程」を導くだけの構造ではない点を強調しています。表1に示すように、『小学社会』の3次構造は、社会科における単元展開の「段階」の道標にはなりつつも、あくまでも3次構造のもとで目指すのは、社会科で求められる資質・能力の育成にこそあります。

改めて冒頭のマンガをご参照いただけると、先述のように、マンガの中の「しゅっぱつ」の前までが第1次、「さらに考えたい問題」をつくるまでが第2次のイメージです。

問題解決学習を大切にしている『小学社会』では、

↓表1 『小学社会』の3次構造で育成を目指す資質・能力

第1次	問題を発見する力を身につける
第2次	問題を追究・解決する力を身につける
第3次	問題を掘り下げ、よりよい未来をつくる力を身につける

それぞれの単元での学習問題を見いだしていくことが第1次の大きな役割となります。この第1次では、子どもたち一人ひとりの素朴な疑問から学習を始め、その素朴な疑問から、みんなで追究したい、みんなで追究するからこそ価値ある学習問題へと高まっていくような学習展開を期待しています。社会科の学習の起点となる第1次で、**みんなで追究したい学習問題づくりを進めることにより、単元や学年が経る中で「問題を発見する力を身につける」ことを目指すのが、この第1次となるのです。**

第2次では、様々な資料を調べたり、色々な場所を見学したり、地域の人々に聞き取りをしたりすることを通して、単元の学習問題を追究して、自分たちなりの学習成果をまとめていきますが、**このような学習の積み重ねにより、「問題を追究・解決する力を身につける」ことを目指すこととなります。**

単元によっては、この第2次をもって学習に一区切りをつける場合もありますが、現行の学習指導要領において、深い学びの方向性として「選択・判断」や「多角的に考える」ことが示された単元については、『小学社会』では第3次で、さらに考えたい問題を子どもたちから掘り起こしたり掘り下げたりすることで、「問題を掘り下げ、よりよい未来をつくる力を身につける」ことまでを目指します。

5 『小学社会』の3次構造に即した具体的な学習の姿

■第3学年の3次構造

それでは、このような『小学社会』の3次構造に即した具体的な学習の姿を、第3学年の小単元「安全な暮らしを守る人びとの仕事」で見参みましょう。

↓表2 第3学年の大単元「安全なくらしを守る」の3次構造

単元名	小見出し	「次」	「次」のねらい
大単元の導入	通学路であぶないところ	第1「次」	学習問題「 <u>地いきの安全を守るため、消ぼうしょやけいさつしょ、地いきの人びとは、どのような仕事や取り組みをしているのだろうか</u> 」の設定。
(火事から人びとを守るために)	わたしたちの市の火事を調べる 消ぼうしょへ見学に行こう 119番のしくみを調べよう 消ぼう隊員の仕事 学校を火事から守るために 地いきの消ぼうせつびと消ぼうだん	第2「次」	・私たちの市で発生している火事や交通事故について、様々な資料から調べ、消防署や警察署、地域の人々の活動に関する見学や聞き取りを行う。 ・調べ学習の成果をもとに地域の安全マップの作成を行い、調べたことを振り返り、話し合いを進め、学習問題に対するまとめを整理する。
(交通事故や事件をふせぐために)	身近な交通事故 交通事故がおきたら 地いきで見かけるけいさつしょの人の仕事 地いきの人びととともに／ 市で取り組んでいること 安全なくらしを守るために／ 安全マップづくり わたしたちにできること	第3「次」	第2次末で設定された、さらに考えたい問題「 <u>わたしたちは、どのようにしてくらしの安全や、命を守ればよいのだろうか</u> 」の追究。

本小単元の前に大単元の教科書冒頭見開きとして、火事と交通事故の様子の大きな写真をもとに、火事や交通事故を防ぐために行われていることを出し合う学習を想定しています。その上で本小単元の入り口となる次の見開きでは通学路などの身の回りの危険を出し合いながら、本単元の学習問題「地いきの安全を守るため、消ぼうしょやけいさつしょ、地いきの人びとは、どのような仕事や取り組みをしているのだろうか」が設定されることを期待しています。ここまですが**第1次**です。

この学習問題に迫っていくために、次の見開き以降では、私たちの市区町村で発生している火事や交通事故について、様々な資料から調べたり、消防署や警察署、地域の人々の活動に関する見学や聞き取りを行ったりすることになります。そのような調べ学習の成果をもとに地域の安全マップの作成をおこなったり、調べたことを振り返り、話し合いを進めたりすることを通して、本単元の学習問題に対する自分たちなりのま

とめを整理していくこととなります。ここまですが**第2次**です。

学習問題へのまとめを行う中で、ここまでの学習で分かったこととともに、新たな疑問やさらに考えたい問題が生じることが期待されます。ここでは、さらに考えたい問題として「わたしたちは、どのようにしてくらしの安全や、命を守ればよいのだろうか」を設定しています。地域の安全は消防署や警察署や私たち以外の地域の人々だけの力だけでなく、私たち自身にできることは何か、私たち自身がすべきことは何かを考えていくのが、ここでの大事な学習となります。大人の目線だけでなく、私たち小学生だからこそ気づいたり感じたりできる安全を守るためのアイデアや考えを地域の人々や消防署や警察署と共有し合うような学習までの想定、すなわち**第3次**までの構造を『小学社会』では紙面化しています。

■第4学年の3次構造

第4学年の小単元「自然災害から命を守る」の**3次**

↓表3 第4学年の大単元「自然災害から人々を守る活動」の3次構造

単元名	小見出し	「次」	「次」のねらい
大単元の導入			
1 自然災害から命を守る	水害のことを知る 水害について調べる	第1「次」	学習問題「水害から人々の命を守るために、どのようにふうや努力があるのだろうか」の設定。
	水害の原因を調べる 水害を防ぐしせつを調べる 自然の力を調べる 情報を役立てる	第2「次」	・水害の原因を川の分布などの地形や土地利用の様子などから調べる。 ・地下調整池やダムなどの水害を防ぐ様々な施設とともに、森林のはたらきやハザードマップなどの防災情報についても調べ、学習問題に対するまとめを整理する。
	災害にそなえる取り組み 災害対さくについてもう一度考える	第3「次」	第2次末で設定された、 <u>さらに考えたい問題「自然災害から命を守るために、わたしたちには、どのようなことができるのだろうか」</u> の追究。

構造はどのようになっているのでしょうか。本小単元の前にも大単元の教科書冒頭見開きとして、地震や台風による浸水、竜巻、噴火、土砂災害による被害の様子の写真をもとに、私たちが生活する都道府県で、かつてどのような自然災害がおこったのかを調べていくための動機付けを想定しています。そして本小単元の入り口となる次の見開き以降では、水害の被害の様子を写真やデータ、被害にあわれた人々の話を確認しながら、本単元の学習問題「水害から人々の命を守るために、どのようにふうや努力があるのだろうか」が設定されます。ここまですが第1次です。

この学習問題に迫るにあたり、まずは水害の原因を川の分布などの地形や土地利用の様子などから調べていきます。また、地下調整池やダムなどの水害を防ぐ様々な施設とともに、森林のはたらきやハザードマップなどの防災情報についても調べを進めて行くことを通して、本単元の学習問題に対する自

分たちなりのまとめを整理していきます。ここまですが第2次です。

この単元でも学習問題へのまとめを行う中で、ここまでの学習で分かったこととともに、さらに考えたい問題として「自然災害から命を守るために、わたしたちには、どのようなことができるのだろうか」が設定されます。行政主導の公助の取り組みとともに、家族や近所の協力や支え合いによる共助や、自分の命は自分で守る自助の具体的な活動や行動のあり方について、私たち自身にできることは何か、私たち自身がすべきことは何かを考えていくのが、この単元でも重要な学習活動となります。

このような令和2年度版『小学社会』の3次構造は、第5・6学年においても基本的には同様です。次号では、第3学年から4年間をかけて育成を目指す『小学社会』の3次構造のさらなる意図について解説を進めます。

社会科 NAVI + 小学社会②

日文教育資料 [小学校社会]

令和4年(2022年)3月15日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社

〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5

TEL: 06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33584

日本文教出版 株式会社

<https://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL: 06-6692-1261 FAX: 06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL: 03-3389-4611 FAX: 03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL: 092-531-7696 FAX: 092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市中区葵1-13-18-7F・B
TEL: 052-979-7260 FAX: 052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL: 011-764-1201 FAX: 011-764-0690